

江源氏鑑

十三



部	部
番	番
号	号
年	年
月	月
日	日

歩根中學圖書部蔵



寄	明治廿貳年以降本校卒業生三百十八名
贈	大正七年六月八日

江源武鑑卷第十三

永祿十一^{戊辰}年

冬終正月大

朔日天氣快晴午剋屋形矢嶋ノ御所へ出仕

二日江陽ノ旗頭中觀音城出仕ノ次第如例

年未剋ニ雪下ル

三日天氣快晴田舞翁武東ニ來テ天御入

四日將軍家觀音城ニ御成旗頭等ノ目見アリ

五日江陽ノ社家等ノ礼ヲ被請



六日 御弓初將軍矢嶋ノ御所ニテ今日クリ
矢ノ真アリ
七日 若州ノ武田義統江東ニ來テ矢嶋ノ御
所ニ出仕ス若狹國鍛冶想五郎作ノ太刀五
十振ヲ將軍家ニ進ス
十五日 將軍并屋形其外諸將江陽八幡ニ社
參將軍御詠哥アリ

今年ヨリヲサマル御代ニ近江路ノ
武田神モメグミヲソフル吾ヤト

廿四日 將軍比良山ノ愛岩へ社參

今二月大

四日 將軍若州御座ヲ可被移トノヨニナリ
屋形諸旗頭ニ命シテ曰將軍若州へ移リ玉
フヘキ不可然ト京極長門守高吉進テ屋形
ニ諫言シテ曰此事可然子細ハ將軍若狹へ
移リ玉ハ北國ノ面々天下ニカヲ合事可有
是レ一覺入道カ先年申コト夕箕作ノ父子
心底不解不意ニ將軍ヲ奉討事モアルヘシ

是二將軍ノ御勇力ノ程ヲモ見玉フヘキ事
ナリ其器ニ當リ玉ハスハタトイ天下再興
アリ共何ノ益カアラシカタク以テ時ヲハ
カリ知リ玉ヘキニハ可然事ナリト云屋敷
曰吾其人ヲ守立ントストモ將軍其器ニア
タリ玉ハスハ取エキナキ事御心ニ任世先
若別へ移シ參世ヨトテ御移ノ日ヲ定メラ
ル今月十六日ニ相定ル江陽ノ旗頭ノ内淺
井下野守息備前守蒲生右兵衛尉三人供奉

ニ相定ル
十三日若洲ノ武田義統江州ニ來ル是ハ將
軍家御ムカヘノタメナリト云
十六日將軍家矢嶋ヲ御立辰剋木野濱ヨリ
御船ニ召サル、ニ午剋ニ雨甚ク降ルニ依テ
堅田ノ浦へ御船ヲツケ宗野民部少輔兼助
カ館へ入玉フ雨ヤムニ依テ又酉剋ニ御舟
ニ召シ玉フ御供舟ノ淺井父子蒲生力舟モ
同時堅田ヲコキ出ス將軍ノ舟小松ノヲキ

ニ少時ノ間カケラレテ月ヲ詠メラル處ニ
細川兵部少輔藤孝一首ヲツラ子將軍ヲナ
クサム將軍モ又一句ヲ作テ月ヲアイセラル
十八日將軍家武田義統ノ館ニツキモフ
十九日若洲ヨリ淺井蒲生カヘリ來テ將軍
家ノ御書ヲ屋形ニ献ス然ニ蒲生カ目將軍
道中ノ郷行ヒフ申テ後ニ小松ノヲキニテ
夜ニ入候ヘハ郷舟ヲカケラレテ候テ細川
兵部一首ヲ仕テ將軍家ヲナクサメ申候ニ

將軍家モ又一句ヲ作ニテ月ヲアイシ玉フ
ト申上ル屋形其哥詩ハナニト問ヒ玉フ蒲
生則記ニ參テ候トテ是ヲ進ス
細川兵部少輔藤孝
見ヘナキ身ト成ヌハ鹽ナラヌ海ノ面ニモウキメ三ル哉
將軍ノ御詩ニ曰
落魄江湖暗結愁
孤舟一夜思悠悠
天公亦慰吾生否
月白蘆華淺水秋
蒲生如此ト言上ス屋形是ヲ取テ深ク三夕

一ヒテ曰藤孝カ哥ニヨルヘナキト云海ノ面
ニウキ人三ルト云事更ニ心得ス世ニナシ人
ヲ當國へ呼取アマツサヘニ勅許ナキニ地下
ヨリ合戦ノ計事ニモヤト天命ヲモ不恐將
軍トアカメ三年ノ間尊敬スル事不斜然ル
ニ若洲へ移玉フヘキ事ナレハ數輩旗頭等
ヲサレソへ道中寔世ニアル將軍ト云共不
異ヤウニ諸事丁寧ヲツクス所ニ何ソ藤孝
カ哥ノ程不心得然ルニ又將軍ノ作トテ江

陽ノ水ウニニ魄ヲトニ愁ラムスヒヒトリ
舟夜スカラタ、ヨフトノ事臣々タレハ君
モ君タル風流人ナリ天公モ將軍ノ舟中ノ
ホトアワレトアルカナキカ月ハ白水清キ
トノ御心根中々云ニ不足天下ノ再興ヲ思
ヒ至フ身トニテハ夜ハ諸候ノ器不器ヲカ
ニカへ晝ハ其行ヲ正クシ英雄豪傑士ヲナ
テ奇正兩道ノ軍旅ヲ思慮シ人ノ心ヲサトシ
殊亂國ノサカイナレハ武業ニイトニナシ

月ヲ燈トシ孫子吳子カ兵術ヲ詠メ玉ヒ道
ノ間モ馬ノ足タテ勢ツカイニヨキ地カ惡
キ地ヲエラミ見玉イ扱又御心ヲ慰メナ
ラハ武ノ法ニイカホトモヨミツラ子度事
多シ一句一首ナリトモ兵哥ナトヲコソヨシ
玉フヘキニナシソアヂキナク江湖ニ愁ヲ結
ヒ孤舟ニ思ヲソヘイタツラニ山川ノ景氣ヲ
ナカメラル、事時節コソアラメ謂タラス圖
タラス主將タル者ハ武林ノ華ヲ尋子兵家

ノ月ニ心ヲスミ給ハ、一首ノ詩哥モナト
カハステニヤ昔日義經楠木正成ナトカ軍
哥共今ノ軍旅ノ軌摸トナルトテ以ノ外ニ
屋形不豫ノ色ヲアラハシ給フ

三月小

三月佐々木御祭礼例年ノコトク屋形并御

二門中旗頭中社參

光三日若洲ノ武田大膳大夫義統ヨリ使節

アリ此旨今月光日將軍家ヨリ細川上野兩

本朝仁王九十九代帝後醍醐天皇在十種
疑滯于時世尊五十有四代祖瑩山和尚能
登國鳳至郡徂岳山捨持禪寺住持有齋聞
即冷孤峰僧問十種疑滯一一勅荅十問十
荅也

帝問曰本是一味平等法為甚廣洞家濟家佛
法有差別異哉

瑩山和尚荅曰譬如禪寶劍臨濟佛法拈寶劍
處能收天下也曹洞家佛法寶劍未出箱早一

天四海收掌中也何收處一也今古佛法無隔
人人根機不同故吾吾受處異別也深淺在人
非法也

帝問曰達磨大師六識具足僧也為甚廣浮芦
一葉哉於此朕疑滯ス

山荅曰今上佛法深密旨可難會唯以平話應
勅益依露身輕浮一葉所也何西來衣達磨皆
渡生滅間露身也真達磨不來不去不生不滅
如此面目為示人航海万里任身波濤到震且

今上真達磨有御相見唯幸也

帝問曰世尊見明星悟道大地有情同時成道

唱出山朕不審也悟人可成道迷人甚廣可成

道哉迷人若成道吾佛六年端坐為甚廣

山荅曰御不審取義也迷人若成道佛明星一

見時節吾自心佛性有情非情禽獸畜類迄皆

本來具足佛性也悟給迷人肉身內具足不知

唯此一見端的可有御領解

帝問曰信是功德母也說朕謂天地未分先混

純無物若有感應何為現

山荅曰天真無相無體雖不運步有靈驗如應

響音雖神靈藏有信則有感應如隨影形今上

可專信心不可不信故有信必有德

帝問曰有僧以趙州無字示朕其語曰莫作有

無會莫作虛無會莫作真無會此三無外未悟

解朕一生恨有此如何會得

山荅曰無字非世界之種種無心無也吾心上

一心不生全体如虛空成法界虛空莫作在無

思又吾心無心而万機休罷時示如是然則見
聞覺知舉手動足去來往還唯這無動也豹子
畜生迄無佛性也可有御領解
帝問曰古語云手不執經卷常轉如是經百千
万億卷既不執經卷轉甚广亦經卷在手不轉
可成妄語如何

山荅曰此經云以文字記錄不經人人分上有
之身是藏殿也胸中納真經四大五蘊具足此
經表紙也又晝夜三万六千度出息入息此經

舒卷也如此悟入此經軸也如此觀心刹那間
大藏經五千余卷盡真讀畢可有御領解

帝問曰法華經云大通知勝佛十劫坐道場佛
法不現前不得成佛道然今時人坐禪修行空
費功哉

山荅曰吾箇佛法元來無相也若現前化相也
亦隨他得終可失功從來這箇佛法不得為得
不現前為現前迷人錯認黃卷赤軸大覺世尊
雖真理可有御領解

帝問曰教者皆以功為行世人士靈備珍酒供
茶湯雖然不消不費以何為功哉

山荅曰有謂古語云隔壁梅華親自已華句雖

通浦座萃藥少不損麝香鼻孔無跡志之通處

亦如此若費化相屬有為生滅可供養非真面

目施彼不名福田供養汝隨三惡道唯一念觀

心處無心養也若一念有施心不名福田其福

田云以手指胸曰驀此也觀心時栽善根種三

世諸佛皆從此發生故云福田迷人錯雖供養

心內思名聞利供養三惡道也孝行心躰也靈

供養孝行用也於此上今上若無御納得譬如

從他得文札辨其用慶料紙文字不損以可有

御會得

帝問曰朕頃者維摩經清淨行者不入涅槃破

戒比丘不墮地獄說如此勤苦修行無用處為

朕示誨給

山荅曰此文依教見難破疑情維摩本意者清

淨涅槃也別無涅槃破戒地獄也別可隨無地

獄其清淨者心上妄念妄執垢染則清淨涅槃也破戒者破佛戒心別求無上道是此外道宗也則是地獄也別可入無地獄可有御領解帝問曰本是一心四大和合爲甚廣有地獄有天道曰知而後山荅曰教內羯羅藍阿浮曇說人初生時父母二血合一念起所成全身自此八万四千塵勞妄相起故圓覺大師云若是見相則一切處見鬼此文意迷心本不本而已念慮情著相一切

所見鬼陽精化成魄魄既成陰魂互三魂七魄成十王責吾無疑此魂魄男女密會時互相感成赤白二血其姿初陽火動則陰水靜也陰水動則陽火靜也陰陽交互十八變而受生是一念已成生時先鋒云死時殿後云人皆此一念已迷而西方三十六億有阿彌陀佛添念念尚添念念年久念機精紛飛而終沉淪冤道於此觀心而一念覺妄不思善惡皆悉解脫也若都莫思量借染有樂著如前三魂七魄十王現

目前墮地獄畢十主十鬼纏十惡等是也悟則
現十地菩薩者也依勅問尊答如此

右ノ旨一一永平寺解説アリ屋形甚信心ヲ
發ス爲後世日記ニトハナリ

十九日若洲ヨリ將軍矢嶋ノ御所ニ御歸坐

武田義統ヨリ田中權頭前野美作守二百騎

ニテ供奉シ來ル義統ヨリ屋形へ密狀アリ

不知ニ依テ不記

北九日西方大ニ光ル

六四五月小へ至

五日佐々木御社祭礼屋形并御一門中旗頭

等ニ至ルテ社參

同箕作右衛門督義彌忍テ上洛スルノヨシ

三田村作内今日祭礼ノ所ニ至テ言上ス

十五日磯野丹波守カニ男權内屋形ノ憤怒

ヲ蒙テ京極家へ頑ケラル是ハ朝倉義景ノ

家人大隅守ト云者ト言上ナクシテ縁ヲ結

ヒタル科也父丹波守ハ其事ヲ不知ラノヨシ

分明ニ依テ御勘氣ヲ免サル
十七日尾洲ノ織田家ヨリ使節アリ密狀アリ
不知將軍家三好誅罰ノ評義ナリト云
廿三日高嶋越中守觀音城ニ出仕シテ言上
ス箕作義彌三好笑岩ト一味シテ矢嶋ノ御
所ヲ討ニトノ評義アルノヨシヲ申上ル越
中守カ家人ニ三好笑岩カ家人ト兄弟ノ者
有テ是ニテ委ク兼ルノヨシナリ
廿四日兼禎へ屋形平井民部少輔ヲ以テ右

衛門督ノ上洛ノ事ヲ聞玉フ兼禎依病氣不
存ノヨシヲ返事アル屋形重テ又使節ヲ以
テ義彌上洛ノ事ハ三好家ト一味シテ將軍
ヲ討ニトノ評義有リト云事分明ニツケ知
スル者アリ其義ニツイテハ義彌國ニカヘリ
入事難キノヨシヲ仰ツカハス兼禎不存ノ
ヨシヲ起請文ヲ書テ平井ニ渡サル
廿五日義彌京都ヨリ江東ニカヘラル屋形
進藤山城守ヲ以テ上洛ノ子細ヲキカル義

彌進藤十同道シテ則登城シテ陳ビテ曰上
洛ノ事ハ別ノ義ニナシ笑岩入道西國ノ住
人等ヲカタライ當國ニ寄來ルヘキトツケ
シラスル者候ニ依テ急キ上洛シテ其事ヲ
聞見スルニ虚説ニテ候ニ依テカヘリ來ルノ
ヨシヲ云屋形尚其心根不解ニ依テ起請文
ヲ書テ進藤山城守ニ渡サル屋形其料ヲ免
シテ箕作ノ城ヘカヘサル重テ又對候ヒ以
滿門六月大

八月尾州ノ織田信長ヒソカニ百騎計ヲ卒
シテ忍テ江陽ニ來テ觀音城ニ入玉フ信長
ノ息女當國ヘ輿入有テヨリハ終屋形對面
ノ事ナシ是始メナリ
今夜江陽ノ旗頭等ヲ觀音城ニ召集メラレ
テ將軍上洛ノ評義アリ今夜丑刻ニ信長觀
音城ヲ立テ美濃ヘカヘラル矢嶋ノ御所ヘ
ハ信長來ルノ事ヲ秘ス江陽ニテモ外様ノ
面々ハ不知

信長百騎討ニテ忍ヒテ當國ニ來ル事目加
多攝津守檜崎太郎左衛門ニ語テ云甚各將
ナリ近年國乱テ聳ト云テ討之旗下ト成テ
ハ其國主ヲ討ツ事此程ノ流例ナルニ少モ
人ヲ不恐寂將ノ器當タル人ナリト評ス檜
崎カ曰カヤウノ人ハ時ニ乘テ必ス國ヲ治
ル人ナリト云
十五日屋敷ノ御所ヨリ當年始テ竹生嶋へ
天女ヲ作テ渡サル先頭後頭ノ兩天女ノ船

音樂ヲ奏シ八崎ヨリ押出スヲヒタ、レギ
祭礼ナリ
右竹生嶋祭礼ノ事ハ坂田郡淺井郡ニ郡ヨリ
毎年其事ヲ行フ今度屋敷ノ御前ヨリ若御
曹司誕生ノ夕メニ天女ヲ渡サルニ依テ淺井
祐政宵ヨリ彼嶋ニ渡テ神事等ノ事ヲ奉行ス
十九日平井加賀守ヲ尾州へツカハス屋敷
密狀アリ不知午剋洪水ス雷鳴テ白毛ヲフ
テス事ヲヒタ、レ

同日自將軍家上野中務大輔ヲ尾州へツカ
ハサル
廿五日屋形旗頭等ヲ召テ今年ノ内將軍家
上洛アルヘキニ信長ト相定メ又面々領分中
へ陣フレスヘキノヨシヲ被仰付

七月小

十五日屋形江陽ノ浦々ノ殺生ヲ今明兩日
ノ内ヲトメラル是ハ母公青樹院殿ノ御吊
上云

十六日尾州織田家ヨリ使節アリ菅屋九右
衛門尉ト云者ナリ信長出頭ノ者ナリ織田
家ヨリ申越サルノ條ハ矢嶋ノ御所ヲ今月
中ニ美濃ニテ御下向有之ヤウニトノ事ナリ
是ハ公義美濃國ニテ下向ニタイテハ尾州
ヨリ東三州遠州ノ諸卒ヲ子カントノ信長
ノ行也遠江三川兩國今川義元討死ノ後ハ
織田家ノ下知ニテアレハ駿州ヨリ其跡ヲ
クヒカヘシ所々駿河へツク者多シ依之信

長公義ヲ先美濃國ニテ御下向ナシ奉テ勢
ヲ付テ江州ノ勢トテツシ合上洛ナシ奉ル
ヘキトノ事ナリ
十七日蒲生右兵衛大夫二男美作守氏春卒
行年二十一歳屋形御愛子ノ人ナリ
廿日尾州織田家ヨリ不破河内守織田十郎
左衛門兩人江陽ニ來ル將軍御迎ヒノ夕メ
ナリ屋形へ密狀アリ不知ニ依テ日記ニノ
廿ス兩使馳走申ヘキニテ伊達出羽守青地

伊豫守ニ被御付兩人カ居城ニテ尾州ノ使
節兩人ヲモテナス
廿五日將軍家矢嶋ノ御所ヲ立テ美濃國へ
御移リ辰剋矢嶋ヲ御立屋形ヨリハ三上伊
豫守淺井備前守兩人五百騎ニテ將軍ノ供
奉ニ濃州へ向フ
廿六日淺井備前守長政三上伊豫守秀成カ
方ヨリ使節ヲ以テ屋形へ言上ス將軍家今
日酉剋ニ至テ濃州立正寺ニ御著座ノヨシ

ヲ告來ル

廿八日淺井三上カ方ヨリ注進ス信長昨廿

七日ニ立正寺ニ來テ將軍家ニ見ヘ奉ラル

甚丁寧ラツクシ其サマ慇懃也トナリ江州

ノ兩使ヘモカタノ如ク信長礼ヲツクシ馬

走ノヨレヲ言上ス

晦日濃州立正寺ヨリ將軍ノ上使來ル細川

兵部大夫藤孝來ル將軍ノ御書ヲ持來テ屋

形ニ献ス細川屋形ニ語テ曰將軍立正寺ニ

御著坐ヨリ織田家遠三兩國ヘ回文ヲ下シ

勢ヲ集ムルニ一万三千騎今日ニ至テ集ル

トナリ

八月小

三日織田家ヨリ使節アリ今月八日ニ先江

州ニテ出陣可有ノヨレナリ屋形ヨリ將軍

モ是ヘ御移リ可然ノヨレヲイフ

四日濃州立正寺ヨリ將軍ノ御教書來ル其

御書ニ曰兼禎父子三好笑岩ト合體ノヨレ

分明ノ旨告知ラスル者アリ然ハ上洛ノサマ
タケト成事アルヘシ早ク箕作ヲ攻ラルヘキ
ノヨシヲ仰下ス屋形ノ曰吾先年ヨリ諸臣ノ
諫言ヲ不兼引兼禎父子ヲタテヲクノ處ニ
方々ヨリ告ケ來ノ上ハ吾一人道ヲ立共ヨ
シナシ箕作ヲ攻ラルヘキノヨシヲ仰渡ス
七日美濃國ヨリ淺井備前守三上伊豫守カ
ヘリ來テ屋形ニ言上スル旨ハ明日信長岐
阜ヲ打立當國ヘ來ヘキニ定テ尾州濃州勢

一万五千騎其外遠州三州ノ者共八千騎都
合二万三千ニテ將軍ニ先立テ上洛ノヨシ
ヲ云屋形ノ曰將軍第一臆病人ナレハ兼禎
父子事ヲ後口メタク思召テ先信長計ヲ上
セラルト見ヘタリ信長當國ニ入テ兼禎父子
ヲ攻討ハ二旗ニテ箕作ヲ攻タルト後世ノ
アサケリ也押付可攻ノヨシヲ仰出ス淺井
平井進藤一同ニ申上ルハイカヤウニモ兼
禎父子ヲ味方ニナシ玉フヘキ御行可然子

細八先年ヨリ各諫言仕時節箕作ヲ攻メ王
フテコソ御寢ニ侍ルニ今公義ノ御教書ノ
來テハ如何カト申上ル屋形明日信長是ニ
來ルベシ然ハ信長ト相談可有トナリ信長
ハ屋形ノ御前ノ父ナレハ如此カ
八日尾州ノ織田信長江州佐保山ニテ出陣
シテ夜ニ入忍テ信長二十騎計ニテ觀音城
ニ入ラル兼禎父子ノ相談ナリト云子細委
ク不知

九日屋形信長御評義有テ屋形ヨリ進藤山
城守信長ヨリ不破河内守將軍ノ上使ニ官
采女正三人箕作兼禎父子ヘツカハシ將軍
三好退治ノ前陣有ヘキノヨシヲ仰ツカハス
兼禎父子ノ返事ニ曰天下草創ノ御合戰ノ
先登可仕ノヨシ身ニ餘テ幸慶タルノヨシ
ヲ返事アル信長大キニ悦シテ此能ヲ將軍
家ニ言上シ追付上洛ナシ奉ラントテ佐保
城ヘカヘラル

十一日二信長美濃へ陣ヲ引入
廿五日三雲三郎左衛門尉力嫡男源三郎右
衛門督ノ氣色ニチカツテ觀音城ニカケ入テ
屋形ニ言上ス其旨ハ義弼ノ事イカニモ三
好ト一味シテ屋形信長上洛ノ跡ヨリ勢州
ノ國司トニ旗ニテ上洛シ先後ヨリ立夾テ
合戰有ルヘキニ定ルノヨシヲ云屋形其實ヲ
夕ツ子玉フ三雲源三郎國司ヨリ密狀トリ
出シ屋形ニ獻ス其外當國ニテ義弼ニ一味

ノ者共起請文ヲ取り出し奉ル屋形サテハ
兼禎父子遊心ウタカイナシ早夕攻討ヘキ
ノヨシヲ旗頭中へ仰渡ス

九月大

二日右衛門督勢州ヨリ夜々加勢ヲ呼取テ
箕作ノ城へ入ノヨシ吉田出雲守カ方ヨリ今
日觀音城へ注進ス屋形淺井下野守祐政ニ
仰せ玉フハ兼禎父子其勢八千ニハスキシ
イカホトモ勢州ヨリ加勢ヲ呼取セテヨリ

攻へし然ハ勢州退治スルニ事安カルヘシト
仰ラル淺井カ曰御掟宸圖ニ當テ覺候トテ
ワサト箕作ノ加勢ヲユルクト入ラル
十九日京極朽木淺井觀音城ニ出仕シテ屋
形ニ言上ス箕作ノ勢一万二千ニ成タルノ
ヨシニ候其上和田山ノ建部源八兵衛吉田
出雲守ナトモウラカヘリ義弼ト一味ノヨシ
ヲ申又勢州ノ國司鈴康越二近日當國ニ入
ノヨシヲ傳聞テ候事御延引ニテハカヘツテ

サカヨセニ成テ六箇敷候ヘキト云屋形ノ曰
時今成各攻口ヲ定メラルヘキトテ

- 一箕作表へハ京極長門守高吉其勢五千騎
- 一淺井下野守祐政息備前守長政父子其勢
四千五百騎合九千五百騎箕作東口へハ
平井加賀守進藤山城守後藤喜三郎右三
人其勢八千騎
- 一和田山南坂へハ澤田武藏守檜崎太郎左衛
門尉伊達出羽守朽木宮内大夫青地伊豫

守合五人此勢六千騎同西坂口へ八京極兵
部大夫蒲生右兵衛大夫兩人此勢七千騎
一勢州國司出張ヲ押へノ夕メニ君カ畠口へ
山崎源太左衛門秀家永田刑部少輔山岡
美作守三人此勢五千騎
一同國司押へトシテ鈴麻口へ多賀新左衛門
尉和田和泉守目加多攝津守三人此勢四
千三百騎
九日卯下剋ヨリ諸手相圖定テ一番ニ和田山

ヨリ攻カ、ル城中ヨリ其勢六千騎ニテ防戦
ス卯下剋ヨリ午剋ニテニ戦フニ敵八百七
十騎討取味方三百二十騎討死ス午下剋ニ
吉田道覺城ヲ出テ命ヲ助ケ玉フヘキニ依テ
ハ城ヲ開渡スヘキノヨシヲ云屋形へ言上屋
形ノ曰諸卒ニ科ナシ建部吉田切腹セハ諸
勢ヲハ助クヘキトノ事ナリ是ニ付テ建部吉
田入道シテ味方ノ陣ニ降ル又屋形ニ注進
スルニ既ニ入道仕ルノ上ハ助命スヘキノ

ヨレニテ和田山ノ城ヲ請取建部吉田二人
八屋形ノ菩提所東光寺へ入寺ス
同日箕作城ニ方ヨリ攻カ、ルニ美禎父子大
手カラメ手へ討テ出テ自ラ拜テ取テ下知
下方三夢ト云者堀下ニ討死スルヲ見テ右
衛門督一騎馳下テ是ヲ助ケラルニ味方ヨリ
右衛門督ヲ討取ラントテ淺井カ家人ニ坂
田十内ト云者馳寄右衛門督ニ鑓ツケシニ
義彌取テカヘシ十内ヲ馬ノ上ヨリツカニテ

ナケラル、箕作ノニ九ヨリ數町ノ堀へナケ
コム是ニテ敵味方大手カラメ手一時ニ入乱
テ戰フニ美禎ノ人數二千三百討死ス味方
八百廿騎討死ス一人モ將タル者ハ不討午剋
ヨリ酉剋マテ戰フ美禎ヨリ軍使ヲ立テ、
城ヲ開クヘキノヨシナリ屋形兼引ナシ美禎
父子ヲ討取ルヘキノヨシヲ諸將ノ方へ仰ツ
カハスニ京極高吉朽木宮内少輔兩人屋形ニ
諫言レテ曰一家ヲ亡シ至ハン事不可然其上

城ヲ開渡スヘキトノ事ナルニ御兼引ナク其
人ヲ誅シ王ニコト良將ノ甚嫌フ處ナリト申
上ケレハイカヤウニモ各次第ト仰ラル、ニ
付テ京極朽木兩人箕作ヲ請取テ兼禎父子
ヲ日野谷カイカケト云所ヘノケタリ此時
ノラク書ニ
ヲシカリシソノミツクリヲ後藤ニカヘテ
今ハカウビシカイカケノ城一都ニ人
元來兼禎父子如斯成王フヘキ事ニテモナク

共六年巳前ニ後藤但馬守ヲコロシ玉フテ
ヨリ屋形トノ御中不和ニ成行テ終ニハ世
ニナシ人ト成玉フナリ寔ニ屋形ノ幼少ヨ
リ近江國ノ政勢ヲ預リ管領職ニテシハイ
有リシニ息右衛門督欲心何トナク出來テ
屋形ヲホ口ホシ國ヲウハワントテ數年夕
クニシカ終ニ天命ニ背キテ如此ニ成行玉
フ也屋形モ兼禎父子數年不義等多アリツ
レ共先考ノ後見ニツケラレテヨリハヒトヘニ

兼禎公慈父ノコトクニ礼ヲツクサレシカハ
國人モ尊敬シ後見ノ義賢ト申タリシナリ
義賢去ル永祿六年後藤ヲ謀討テヨリ兼禎
家ヲウシナヘルニ依テナリ

廿一日將軍并織田上総介信長其勢貳万八
千ニテ今卯上剋ニ濃洲立正寺ヲ立玉フノ
ヨシ池田庄三郎カ方ヨリ屋形へ早飛脚ヲ
以テ言上ス午下剋ニ觀音城ニ來ル屋形池
田カ方へ舊功ヲ思フ處丕斜トノ御事也

同日將軍江州栢原上菩提院ニ御著陣ノヨシ
ヲ告來ル信長田中城ニ參陣ノヨシナリ
廿二日桑實寺ニ將軍御著陣ノヨシヲ告來
ル信長ハ番場ニ參陣ノヨシナリ
同日酉剋ニ屋形觀音城ヲ立テ將軍御迎ノ
タメトテ桑實寺へ移リ玉フ將軍へ對面アリ
公義先兼禎父子ノ事ヲ仰玉フ其者國ノ害
ト知テ一族タリトイへ共天下草創ノタメ
ヲ思ヒ追拂アルノヨシ御感不斜ノヨシ也

廿三日卯刻ニ屋形桑實寺ヲ立テ觀音城ヘ
カヘラル同未刻ニ將軍觀音城ニツキ玉フ
信長ハ武佐ニ著陣ナリ屋形信長評義ニテ
一兩日先人馬ノ息ヲヤスメラルヘキトノ
事也

廿七日吉日ノヨシニテ觀音城ヨリ將軍家
上洛シ玉フ天下草創ノ上洛ナレハトテ行烈
等ヲ定メラル、ニ前陣ハ信長ニ陣ハ屋形三
番ニ將軍家御立ノ事ニ相定ルニ屋形ノ曰

信長ヨリ吾若年ナリ其上信長既慈父ノ札
アリ加之當家代々天下草創ニ其功ヲアラ
ハスト云事世間人口ニアリカタク以テ先
陣スヘキトノ事也信長ノ曰吾ヲ慈父ノ思
ヒヲナシ礼ヲ正シ玉フ事甚ハツカシキ事也
殊古例ヲ引玉フ處寂天下草創ニ佐々木ノ
家ヨリ其功ヲアラワシ玉フ事古今タメシ
多トテ前陣屋形ニ陣信長ニ相定テ今日辰
刻ニ觀音城ヲ立玉フ

一先陣屋形其勢五万六千騎此備十三備

實ハ江陽之勢三万五千騎也

ト云勢ヲ多スル事ニ行有ト也

先手七手組是江州御代々先手家也

目賀田攝津守 馬淵伊豫守

伊庭河内守 三井出羽守

三上伊豫守 落合出雲守

池田大和守

右七人ノ勢五千騎

二番備

浅井下野守

同備前守

高嶋越中守

朽木宮内大輔

右此勢四千三百騎

三番備

永原大炊頭

同筑前守

平井加賀守

檜崎内藏介

鯨江又八

右此勢三千四百騎

四番備

京極長門守

同治部大夫

黒田日向守

坂田兵庫頭

水原河内守

右此勢四千三百騎

五番備

蒲生右兵衛太夫

後藤喜三郎

和田和泉守

種村參川守

右此勢二千八百騎

六番備

澤田武藏守

種村大藏大輔

永田刑部少輔

山崎源太左衛門尉

青地駿河守

朽木宮内大夫

右此勢三千七百騎

七番備

小川孫一郎

久徳左近兵衛尉

野村越中守

鏡兵部少輔

右此勢二千五百騎

八番備

平井丹後守

倉橋部右京進

赤田信濃守

宮川三河守

田中石見守

大野木土佐守

三田村左衛門佐

加藤佐渡守

青地右此勢三千二百騎

九番備

山岡美作守

磯野丹波守

箕浦二郎左衛門尉

多賀新左衛門尉

右此勢二千三百騎

十番備

今村掃部頭

堅田刑部少輔

大宇太和守

高橋越前守

屋子出雲守

森川長門守

狗丹後守

隱岐右近大夫

右此勢三千百騎

十一番備

屋形御本陣御旗本之勢八千騎

十二番備

進藤山城守吉備

同伊勢守

同尾張守三千

同宮木右兵衛尉百

右此備四千二百騎

十三番備

松下若狹守

間宮佐渡守

阿閉淡路守

高野瀨十兵衛尉

堀伊豆守吉備

水原采女正

吉田出雲守吉備

建部傳八兵衛尉

河端左近大輔

大原大學助

木村筑後守吉備

山内讚岐守

右此勢三千八百騎

一二陣織田家其勢六万六千騎以上十七備

實八四万二千騎也
行右江陽二同ト也

一番備

佐又間右衛門尉

同大學助

同刑部少輔

同左京進

右此勢五千七百騎

古二番備 千二百騎

飯尾近江守

同隱岐守

織田玄番允

同大膳亮

右此勢三千二百騎

三番備

一水野帶刀左衛門尉

同大膳亮

築田出羽守

佐々隼人正

木村右此勢二千五百騎

同大膳亮

同大膳亮

林佐渡守

池田庄三郎

毛利新介

梶川平左衛門尉

織田源兵衛尉

右此勢三千騎

末麻呂五番備

柴田權六郎

前田又左衛門尉

德川三川守

寺林右此勢四千二百騎

末不越六番備

同大膳亮

木下藤吉郎

同雅樂頭

毛利河内守四十二織田造酒丞

織田右此勢三千五百騎

柴田七番備

又式部卿

不破河内守

同彦三

織田上野介

坂井右近將監

中嶋豊後守

右此勢二千八百騎

林八番備

織田五三郎

明知十兵衛尉 山田三左衛門尉

蜂屋兵庫頭

右此勢四千五百騎

九番備

山口飛彈守

遠山河内守

岩室長門守

織田左馬九郎

右此勢三千二百騎

十番備

丹羽五郎左衛門尉

津田掃部頭

福富平左衛門尉

右此勢三千四百騎

十一番備

佐々内藏助

河宛與兵衛尉

野々村三十郎

澤田越後守

津田源八郎

右此勢二千三百騎

津田源八郎

織田家御旗本其勢一万騎

大山越十三番備

織田十郎左衛門尉

同美作守

同市令助

同左助

同孫五郎

右此勢二千騎

十四番備

森三左衛門尉

稻葉又左衛門尉

村井民部少輔

右此勢二千百騎

十五番備

氏家常陸守ウチノチノエ 轉マシ 稻葉伊豫守イナハ

伊賀伊賀守イカガ 名字後改安藤イカガ 式部門掾

右此勢二千四百騎

十六番備

村井民部少輔ムラノ 同丹後守タニ

嶋田所之助シマタ 奥平十内オクヒラ

加藤三右衛門尉カトウ 甲斐越前守カハ

犬山越中守イヌヤマ 名塚采女正ナツカ

乾加賀守イヌサ

右此勢四千二百騎

今日未々十七番備

織田孫兵衛尉オリ 同主水正ミツ

大丸毛伊豆守オホマルモウ 山口半左衛門尉ヤマグチ

三岡部又右衛門尉ミノカ 堀池主膳正ホリイケ

前田一學マエダ 小島左馬允コジマ

丹羽想内兵衛尉ニノノ 瀧野源八タニノ

寺田善右衛門尉テラタ 篠川兵庫頭シノガハ

團平八右衛門尉

永井新太郎

森兵部左衛門尉

右此勢三千四百騎

三陣二將軍家御近習御勢二千騎細川兵部

大輔藤孝上野中務大輔清信五百騎二テ將

軍ノ御先ニ立テ二行ニウツ

今日未ノ下剋ニ將軍三井寺觀音院ニ御著

座アル屋形ノ勢八大津松本馬場茨川先陣

八山科ノ里々ニ陣取ル信長ノ勢ハ多野勢

多石山草津坪井目川ニ陣ヲ取テ明日六八

日ニ京都ニ入王フヘキトノ事也

同日戌剋ニ江州七手組栗田口へ打入テ陣ヲ

取ルニ三好笑岩ノ勢カ、ラスアマツサヘ

味方ノ勢大勢ノヨレヲ聞テ三好カ一族等

近國ノ城々へ引籠ノヨレヲ栗田口ニ陣取

七手組ヨリ言上ス三好一家ノタテ籠ル取

ノ城々一々書付ヲ以テ言上ス

一岩成主稅助同備前守三好新左衛門尉三

人此勢二千五百騎ニテ青龍寺ノ城ニ夕

テ籠リ候事

三好日向守同下野守二人此勢五千騎ニ

テ芥川城ニ夕テ籠リ候事

三好笑岩カ旗奉行池田筑後守ハ居城池

田ノ城ハ一千五騎ニテ夕テコモリ候事

同松永彈正少弼子右衛門佐八北白川ニ陣

取テ將軍京都ニ入至ワハ諸手トテツレ

合テ戰フヘキトノ事ニテ候此勢三千五

百上申候事

大將三好山城入道笑岩ハ國ノ勢ヲモヨ

ヲシテ上洛スヘキノヨシニテ四國ヘカ

ヘリ申ノヨシニ候事

一松山新入松謙齊ハ八百騎ニテ高槻ノ城

至ヘ夕テ籠リ候事

三好備中守ハ千五騎ニテ茨木ノ城ヘ夕

テ籠ノヨシニ候事

一篠原右京進同小市郎澤田右近大夫三人

ハ笑岩ノ下知下ニテ横鑓ノ夕メニ小清
水瀧山ノ兩城ニヲキ申ノヨシニ候事
右ノ一書ハ江州七手組ノ先手ヨリ大津ニ
至テ屋形へ注進ノ旨如此子剋ヨリ人數少
リ出シテ廿八日ノ巳剋ニハ將軍家都ニ入
玉フ將軍家ハ相國寺慈照院ニ御本陣ヲス
ヘラル屋形ハ南禪寺ニ本陣ヲスヘラル信
長ハ東福寺ニ本陣ヲスヘラル
廿八日未剋ニ江州七手組目賀田馬淵伊庭

三井三上落合池田其勢八千騎ニテ北白川
ニ陣取タル松永彈正力手へ攻寄スルニ松
永父子降參スヘキノヨシ同名左近將監ト
云者ヲ以テ七手組へ告來ル七手組ヨリ屋
形へ言上ス屋形人ジチヲ取テ松永ヲ南禪
寺ニ召寄テ信長へ使節ヲヤリ玉ヒ評義有
テ同日酉剋ニ將軍へ屋形信長御兩所同道
ニテ松永父子將軍へ礼アリ松永吉光ノ脇
指ヲ將軍家ニ進上ス此ヲキサシハ赤松ノ

家ニ代々持來テ小兒ト云ヒレワキサレニテ
天下ニ雙十キ一腰ナリトナリ
尤九日京中ノ役人醫師名人等相國寺將軍
ノ御所へ御礼ニ參ス屋形信長御兩殿毛相
國寺へ移リ玉ヒテ三好退治ノ評義アル
同日連歌師ノ紹巴相國寺ニ御礼ニ參テ將
軍ノ御前へ扇子二本ヲ奉テ
二本手ニ入
今日ノ悅ト云テカレコマル將軍笑テ
ニオアソフ千代万世ノ扇ニテトツケ玉フ

今日屋形信長將軍ノ御前ニテ軍評義有テ
先岩成主統助同備前守三好新左衛門力夕
テ籠リタル青龍寺ヲ可被攻ニ定テ御兩殿
ヨリ仰付ラル人々
一江陽ヨリ目賀田攝津守進藤山城守平井
出羽守蒲生右兵衛大夫京極長門守五人
此勢五千三百騎ナリ
一尾陽ヨリ柴田修理亮蜂屋兵庫助森三左
衛門尉坂井右近織田十郎左衛門五人此

勢六千五百騎也。二手ノ勢一万千八百騎
ニテ青龍寺表ヘツカハサル今日午下剋
ヨリ攻カ、リ申剋ニテニ味方ヘ討取首數
百三十五酉剋ニ軍ヲヤメテ勢ヲヤスム
右十人ノ大將ヨリ京都ノ御兩殿ヘ如此
注進ス義秀信長御評義有テ敵ニ間ヲア
ラセス攻落スヘキノヨレ重テ陣所ニ申
渡サル同日戌剋ヨリ十人ノ大將三方ヨ
リ青龍寺ノ城ヘ攻寄テ三方一度ニ時ヲ

作テ攻カ、ルニ然ニ岩成主稅助同備前守
三好新左衛門降參仕ル御味方ニ可參ノ
ヨレヲ竹中内膳正ト云者ヲ出シ目賀多
カ陳所ヘ告來ル此由京都ヘ注進スルニ
御兩所イカヤウニモ各可然ヤウニ可計
ノヨレヲ仰ラル依之其夜ノ丑剋ニ青龍寺
ヲ請取テ岩成主稅助同備前守三好新左
衛門三人ヲ各召具シ相國寺ニカヘル義
秀信長御兩所モ相國寺ニ出仕有テ岩成

主税同備前三好新左衛門ヲ將軍家ノ御
所へ出サレ岩成雙眼ヲ紅ニシテ礼ヲナス
トナリ甚軍忠ヲ抽テ助命ノ恩ヲ送ラニ

ト云

一 岩成二人ハ江陽ノ御手ニ付テ攝津國退

治ノ先陣ノ内ニ加ヘラル

一 三好新左衛門尉ハ尾陽ノ御手ニ付テ同

夕攝津國退治ノ先陣ノ内ニ加ヘラル

一 松永父子尾陽ノ御手ニ付テ同攝津國退

同治ノ先陣ノ内へ加ヘラル

十月小

朔日卯刻ニ攝津國退治トシテ江陽尾陽ノ

兩將京ヲ立玉フニ芥川城ニ夕テ籠リタル

三好日向守同下野守細川六郎九叶ハトヤ

思テ今日城ヲ開キ退テ四國へ落行ノヨシ

注進アリ

二日兩將御評義有テ小清水ノ城ニ夕テ籠

リタル篠原右京進同小市郎澤田右近大夫

ヲ攻ラルヘキニ定ルニ是モ今朝辰剋ニ城ヲ開
退テ四國へ落行ノヨシヲ先陣ノ面々ヨリ
注進ス中々攻事ナク江陽尾陽ノ勢手ヲ打
計ナリ山崎源太左衛門尉秀家一首ノ狂歌
ヲツラヌ

落去テ何クニナリノ芥川更ニウキ名ヲ流ス細川
平井加賀守是ヲ聞テ又一首

落テ行スハ三好ト思ヘ共アメカ下ニハカタウトモナシ
同日申剋江陽七手組衆池田城へ攻寄此城

ニハ三好笑岩カ旗奉行ニ池田筑後守千五
百騎ニテ夕テ籠タル南ノ口へ足輕ヲ出シ
防ク處ニ落合カ手へ池田力足輕大將高山
門内ト云者ヲ討取申剋ヨリ酉剋ニ至テ合
戰有テ池田筑後守人質五人ヲ出シ降參ス
依之池田城七手組へ請取ル佐久間ト目賀
田兩人ノ取次テ江尾ノ御兩所へ御礼申シ
池田筑後守政久國武丸ト云太刀ヲ屋形ニ
獻ス信長へハ龍尾ト云名馬ヲ獻スルナリ

三日松山新入松謙父子ハ高槻ノ城ニ八百
騎ニテタテコモリタルカ松永カ手へ使節
ヲ立テ降人ト成テ御味方ニ參ス即兩將今
月礼ヲ請サセラルヘ請取カ人開テ有
同茨木ノ城ニコモリタル三好備中守モ松山
カ降人ト成ルヨシヲ聞テ即松永カ手へ夕
ヨツテ同日未剋ニ天神ノ馬場へ參上テ御
兩將へ礼アリ
四日河内國若江城ニ居住セシ三好左京大

夫義次今日天神ノ馬場へ參著シテ兩將へ
礼アリ義次元來前將軍義輝公ノ御代ヨリ
一門ヲ離テ御味方セシ人ナリ殊義輝公御
生害ノ時ニ軍忠ヲナシケレ共一門多勢ニ
依テカタク若江城へ引取テ江陽尾陽ノ上
洛ヲ待居タル者ナリ
同日江尾ノ兩將評義有テ先勢ヲ打入上洛
有ヘキニ定テ三好義次ヲハ四國ヨリ笑岩カ
若上洛スル事アラハ防キ戰フヘキトテ河内

一國ノ勢ヲ付テ若江城ニカヘサレテ江尾
ノ兩將歸洛アル
五日酉剋ニ江尾ノ兩將相國寺ニ參着將軍
御對面有テ天下再興ノ守護人ナリト悦シ
至フトナリ
一今月去月ノ内ニ治メラル國スヘテ三箇
國ナリ攝津和泉河内ナリ
六月兩將御評義有テ洛中洛外三タリカハ己
キニ依テ江陽ヨリ蒲生右兵衛大夫進藤山

城守馬淵伊豫守三人尾陽ヨリ柴田修理亮
坂井右近森三左衛門三人兩方ヨリ洛中洛
外ノ奉行ニ出サル是ハ洛外ニテ下々ラン
ホウ等ニ付テナリ
右ノ六人評定シテ洛外七口洛内十七口ニ
制札ヲ立ルノ條々

禁制

一當手之軍勢等上下之輩乱妨狼籍於有之
者其身者不及申組頭共可爲曲事更

一 猥山林竹木伐採之事

一 押買押賣并追立夫之事

一 女房并小童等乱取事

一 諸公家面々諸門跡等乱合會之事

一 無上意之輩近國誅罰不可向事

一 御下知無之乱歸國仕間敷事

右條々於違背之輩者速可被處嚴科者也

依仰如件

蒲生右兵衛大夫 柴田修理亮

永祿十一年十月六日

進藤山城守

坂井右近將監

馬淵伊豫守

森三左衛門尉

十一月將軍義昭公初テ參内アリ辰剋行烈

等ヲヒタシキニ依テ日記ニノ世ス將軍ノ

御次ニ屋形其次ニ信長其次ニ江陽尾陽旗

頭中ナリ

同日將軍家從二位大納言征夷大將軍ニ任

ラレ玉フ尾陽江陽ノ兩將宰相ニ任セラレ玉フ
十二日ニ兩將ノ御申ニ依テ尾陽江陽ノ旗頭
四十五人受領ス
十五日兩將相國寺ニ出仕ニ評義有テ將軍
家守護ノ旗頭二十四人ヲ相國寺ニヲカル
將軍家守護ニヲカル、面々ニ式部門掛

江陽旗頭内

蒲生右兵衛大夫

朽木宮内大夫

高嶋越中守

黒田日向守

野村越中守
山崎源太左衛門尉
今山岡美作守
進藤伊勢守
尾陽旗頭内
飯尾近江守
織田玄番允
木下雅樂頭
中嶋豊後守
澤田武藏守
青地駿河守
尾子出雲守
佐久間大學助
築田出羽守
林佐渡守
山口飛彈守

山田三左衛門尉

坂井右近將監

岩室長門守

織田十郎左衛門尉

右北四人ノ勢八千騎ナリ

十六日尾陽江陽兩將御殿玉ハツテ同日午
剋ニ尾陽江陽ノ兩將京都ヲ御立歸國セラレ
廿日織田家觀音城ニ今日マテ四日逗留ニテ
今未剋ニ觀音城ヲ立テ美濃岐阜へ歸城ス
廿八日屋形旗頭中觀音城ニ召集メ今年度
々々合戰ニ其功ヲアラハシタル面々ニ今日

感狀等ヲ玉ハルスヘテ倍臣ニ至ルニテ屋形
ノ證文ヲ下サル者七十二人ナリ

十一月大

十一日京都ヨリ上使細川兵部大輔藤孝江
東ニ來テ將軍家ノ上意ヲ述セラル屋形へ
攝津國信長へ和泉國ヲ下シ玉フトノ事ナリ
十二日上使細川兵部大輔江陽ヲ立テ美濃
へ下向ス右ノ事ニ依テナリ
廿九日關東ヨリ例ノ山伏大泉坊江陽ニカ

へリテ今日觀音城へ出仕レテ言上ス今月
二日甲州ノ武田入道信玄駿河國へ出張シ
今川氏真ト戰フニ氏真ノ家礼ニ嶋田右近
ト申者逆心ニ信玄ニ頼ミレテ討畧シ氏真
ヲタテ出ス氏真ハ遠州ノ掛川へ退カレ候
ヤカテ尾陽ノ織田家へ氏真ハタヨリ申サレ
ヘキトノ事也ト申候依之信玄駿河國ヲ治
メラルハニ付テ伊豆ノ北條左京大夫氏康息
氏政武藏相摸伊豆ノ軍勢ヲ集メ來ル十二

月ニ駿河表へ出張シ武田ト一戰可有ノヨリ
ニ申事候此比駿河ノ符中ト申所ニラク書
ヲタテ候ニ
入甲斐モナク大僧正ノ官賊カ
ヨクニスルカノヲイタラスニヨ
氏真ハ武田ノヲイ也是ニ依テ如此ト也又
信玄小國ノ守護故ニ官位ヒキクテ四品大
膳大夫ニテアレハ口惜思テ勅許ナキニ先
年入道ニ自ラ大僧正法性院ト号ス此ニヘニ

カヤウノラク書ノ立ルカト云今川氏真ハ
北條氏康ノホウチウキチヤス駕カナリ

十二月小

四日攝州セツシュウ屋ヶ崎ノ宿天火ニテ不殘燒亡ス
キタイノ事アリ三方ヨリ同時ニヤケ出テ
人民牛馬等多死トナリ是ハ摩耶ノ觀音ノ
タケリ也ト世人云子細ハ去月廿八日ニ
ヤノ住僧彼寺建立ノ爲ニ諸國ヲ廻リテ金
銀等ヲ集メテ去ル廿八日ノ夜ニ屋ヶ崎ニ

一宿スルニ所ノ者五十人計集テ僧十五人ヲ
サレ殺シ右ノ金銀ヲウハイ取リレナリ依
之今如此ト云天理可恐後人ノ爲ニ是ニ記
スモノナリ

十五日午刻地震未剋ニ南方ニ赤氣三筋立
ツ甚々天下ノ吉兆ナリト云南方ハ離ニテ
火カ本色ナルニ依テ違フ事ナキニ依テカ
ク云カ

廿一日酉刻ニ京都ヨリ上野中務大輔清信

江東ニ來ル將軍家上意ノ旨ヲ述セラル屋
形へ北陸道ノ管領職ヲ拜任アル其詞ニ曰
當家既及十有余代欲絶大祖累代之家業
之處義秀信長被廻百戰之術忽天下之再
興寔當家之可謂守護神因茲父之管領職
北陸道都七箇國今以可爲管領者也委細
川兵部大輔可申狀如件
永祿 十二月廿一日 義昭

近江修理大夫殿

同織田家へ八東海道十五箇國ノ管領職ヲ
拜任アル其詞江陽へ來ル御書ト文言違別
トシ申上ル
廿二日上使上野中務江陽ヲ立テ濃洲岐阜
へ下向ス右ノ御使ナリ
同日江陽ノ旗頭等觀音城ニ出仕シテ今度
天下草創ニ依テ屋形北陸道管領職拜領人
御祝義ヲ申上ルニ屋形心ヨカラス淺井備
前守長政ニ仰下サルハ信長事寂吾力爲六

舅ナリ殊ニ近年ハ美濃三川遠州ニテキリ
取テ武功天下ニアラハセハ吾カ爲ニヒトヘ
ニ慈父ノ如シトハ思ヘト今度將軍ヨリ兩人
管領職ヲ賜ルニ吾ニハ父ノ管領ヲツキメ
ナク玉ルニテニテ信長ニハ東海道十五箇國
ニテ賜ル事甚キツクワイ也トノ夕ニ夕ニ
井カ申上ルハ將軍先年ヨリ御取立ノ功ヲ
不思召其上屋形ノ御母公ノ爲ニハ將軍ハ
御弟ナリ然ハ何ソ信長ヨリ國ヲスクナク

與ヘ玉フヘキ事ナシ殊更將軍世ニナシ人
ト成玉フヲ屋形ノ御計トシテ當國矢嶋ヘ
御座ヲ移シ勅許ナキニ將軍トニテ尊敬
ツテ近國ノチナミヲユイ三年ニテ守立テ
今將軍トナシ玉フハ皆當家ノ御勤ナリ年
内ニ上洛有テ天下ニ旗ヲ立ラレ將軍ヲ討
チ奉テ屋形天下ノ權ヲ取テ武將トナラセ
玉ヘ尾州ノ織田家ヲ淺井一人ニ仰付ラレ
八年ヲコヘサセス誅罰スヘシト何ノ手モナク

申出ス屋形大キニ悅テ汝々ニアラハ天下
ヲ知一事手裏ニアリト仰ラル、ニ淺井下
野守祐政進テ諫言ス天下ハ一人ノ天下ニ
アラスト云事ハ古今申傳ル處ナリ天ノ與
ヘヲ待タニイ可然其上ノ政務ニ一定惡事
アラニ時思召立玉ヘ又織田家ノ御事モ今
以テハ御ヲヤカタ分ニテ候ヘハアナタニ
非義ナキヲ攻玉ヲナラハカヘツテ味方ニ
利有ルニ天ノ與フル時ヲ待玉ヘト達テ

謙言シ奉ルニ依之屋形此義ニ同ストナリ
北七口江南江西江北ノ旗頭中觀音城在番
當年ハ御免ニテ今日各領分ヘカヘル

江源武鑑卷第十三終

